

<はじめに>

この度は、弊社製品をお買い上げ頂きまして、誠にありがとうございます。
本紙では、DLTライブラリ装置 PG-DLL402（以下、本装置）および増設ドライブ PG-DLL004 を
弊社 PRIMEPOWER/GP7000F ファミリに接続する場合の留意事項について説明しています。

製品の使用に関する重要な情報が含まれていますので、別冊の取扱説明書と合わせ、本書に従って正しく
お使い頂きますようお願い致します。また、本書は取扱説明書とともに保管してください。

1. ソフトウェア動作環境

本装置の動作環境は以下の通りです。

動作OS	(日本語) Solaris 2.6 (ソフトウェア修正: 105847-09 以降) (日本語) Solaris 7 (ソフトウェア修正: 107460-08 以降) Solaris 8 (ソフトウェア修正: 108725-03 以降)
必須ソフトウェア	(日本語) NetWorker 5.5.X (日本語) NetWorker 6.X (日本語) VERITAS NetBackup BusinessServer 3.4 (日本語) VERITAS NetBackup DataCenter 3.4

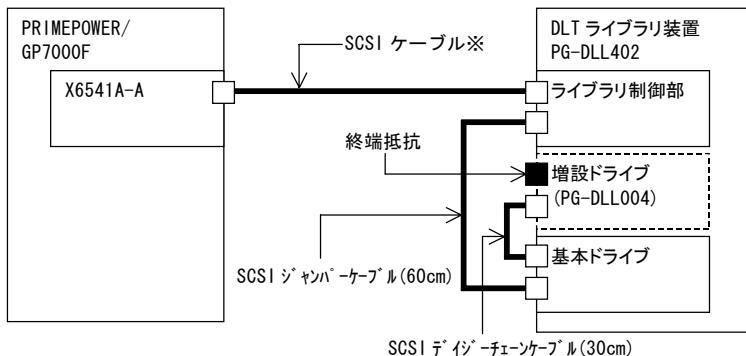
本装置を使用する場合、/kernel/drv/st.conf ファイルに以下の定義を追加してください。

```
tape-config-list =
"QUANTUM DLT8000", "Quantum DLT8000", "QDLT8";
QDLT8 = 1, 0x36, 0, 0x9639, 4, 0x84, 0x85, 0x88, 0x89, 3;
```

2. 装置の設置および接続形態

本装置の設置については、本装置添付の「DLTライブラリ装置 (PG-DLL402) / 増設ドライブ (PG-DLL004) 取扱説明書」の「第2章 設置と接続」を参照してください。

サーバへの接続形態は以下のようになります。



【お客様へ】 PRIMEPOWER/GP7000F ファミリ に接続する場合の留意事項

※ SCSI ケーブルについて

ケーブル長が、X6541A の添付品 (2m) で短い場合は、別途、X3830A (4m) または X3831A (10m) をご使用ください。本装置に添付される 5m の SCSI ケーブルは、コネクタの形状が異なるため、X6541A との接続には使用できません。

3. 運用注意事項

(1) データ転送ブロックサイズ

tar コマンドなどの Solaris の OS コマンドを使用して本装置にバックアップを行う場合は、block size が 64kB となるように指定してください。block size を指定せず、既定値のまま使用した場合、性能低下や媒体エラー発生の原因となる場合があります。

(2) データ交換

本装置のハードウェアは GP-DLL351A で書き込まれた媒体を読み取る機能がありますが、データ交換を行う場合は、同じバックアップソフトまたは OS コマンドを使用する必要があります。また、他社機および他の型名の製品とのデータ交換は動作保証できません。

以上

商標一覧

DLT は、クアンタム・コーポレーションの商標です。

SunVTS は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems 社の商標および登録商標です。

Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。

その他、記載されている会社名および製品名は、各社の登録商標です。

<はじめに>

この度は、弊社製品をお買い上げ頂きまして、誠にありがとうございます。
本紙には、**製品使用時の注意事項および機能の追加説明**を記載しております。

製品の使用に関する重要な情報が含まれていますので、別冊の取扱説明書と合わせ、本書に従って正しくお使い頂きますようお願い致します。また、本書は取扱説明書とともに保管してください。

1. 注意事項

(1) 媒体エラー発生時の対処方法

磁気テープ装置は、媒体から出る汚れや浮遊塵埃により、突発的に媒体エラーが発生する場合があります。DLT装置では、以下の通り対処してください。

- 1) 同じ媒体でバックアップをやり直す。
セルフクリーニング効果があった場合はこれで復旧する場合があります。
- 2) 再びエラーが発生した場合は、クリーニングカートリッジによりヘッドクリーニングを行い、同じ媒体でバックアップをやり直す。
クリーニングカートリッジで汚れが取り除かれ、通常は本処置で復旧します。
- 3) 再びエラーが発生した場合は、媒体を交換する。
交換した媒体で復旧すれば、交換前の媒体の消耗・不良が考えられます。
- 4) 再びエラーが発生した場合は、クリーニングカートリッジによりヘッドクリーニングを行い、同じ媒体でバックアップをやり直す。

以上の方法で復旧しない場合は、ハードウェアの保守担当に連絡してください。

(2) バックアップのリトライ処理

突発的に発生する媒体エラーによるバックアップ失敗は完全には無くせません。DLT装置で発生する媒体エラーは、通常はヘッドクリーニングを行った後、リトライすることで復旧します。毎回のバックアップを確実に行うためには、媒体エラー発生時はヘッドクリーニング後にリトライ処理を行ってください。

(3) データ転送性能

本装置の仕様にあるデータ転送速度はハードウェア性能です。データ転送性能は、装置の動作環境(ホストマシンの性能、アプリケーションソフトウェアの実行状態、データの圧縮率、等)により変化することがあります。

(4) ラック搭載位置

本装置は媒体をスライド式のドロワ(引き出し)内に搭載しますので、装置をラックの上部に搭載した場合は媒体の出し入れに脚立、踏み台、等が必要です。

(5) データカートリッジ

装置に添付されるデータカートリッジは、動作確認用です。
お客様にて使用されるデータカートリッジは、別途、サプライ品をご用意下さい。

(6) データの長期保管

カートリッジに記録されたデータを長期間(1年以上)保管する場合は、保管環境条件(温度23度±5度、相対湿度50%±10%、磁場環境4000A/m未満)を守る必要があります。

2. ライブラリセルフテスト機能

本装置のパネルのメニューを操作し、オフラインでライブラリの動作確認を行うことができます。ライブラリセルフテストにより、ピッカーメカニズムやバーコードスキャナ自動補正などのテストが行われます。

ライブラリセルフテストは以下の手順で行うことができます。

- (1) 診断カートリッジを用意します。 診断カートリッジは、装置に添付されている保守用データカートリッジに、診断カートリッジ用バーコードラベル（「 DG 」が表示されたラベル）を取り付けて用意します。
- (2) ライブラリ装置内の任意のセルに診断カートリッジをセットします。
- (3) [MENU] ボタンを押し、[Main] メニューに戻ります。
- (4) [Diagnostics] の左側に “ > ” 記号が表示されるまで、矢印ボタンを押します。
- (5) [SELECT] ボタンを押します。ステータス画面に [Diagnostics] メニューが表示されます。
- (6) [Library Self-Test] の左側に “ > ” 記号が表示されるまで、矢印ボタンを押します。
- (7) [SELECT] ボタンを押します。
ステータスディスプレイに、[Are you sure?] メッセージが表示されます。
- (8) [SELECT] ボタンをもう一度押します。
ライブラリセルフテストの実行中には、ステータス画面に、[Running Init Test] メッセージが表示されます。ライブラリセルフテストが完了すると、ステータス画面に [Command Completed] メッセージが表示されます。
- (9) ライブラリセルフテストが完了したら、[MENU] ボタンを 2 回押し、[Main] メニューに戻ります。

以上